

# 湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察V

## —正岡子規の俳句を通して—

Analysis of foot warmers or hot water bottles from the  
standpoint of their formative process V

— Through a haiku by Shiki Masaoka —

伊藤紀之・宮澤俊恵

Noriyuki ITO, Toshie MIYAZAWA

### 1. はじめに

湯たんぽの初出の文献は文明18年（1486）、季弘大叔著『蔗軒（しょけん）日録』である。

語源は、中国語の湯婆であり、唐宋音で〈たんぽ〉と呼んだ。しかし、その形状、材質は不明である。形状、材質が分かるものでは、正徳2年（1712）の『和漢三才図会』に湯婆の説明がある。湯婆は〈たんぽ〉と呼び、銅で作られ、枕ぐらいの大きさで小口があり、湯を入れ、褥の傍らに置き腰脚を暖めるとあり図示されている。同じく寛政元年（1789）に開版された『江戸萬物事典』には湯婆を〈とうぼ〉と呼び、木製の酒器状のものが示し、「とうぼとは〈たんぽ〉のことをいう。桐、銅、陶などで作り、器の中に湯を入れ足を温めるものをいう。脚婆ともいう、……。」と説明されている。江戸期には湯婆には「たんぽ」あるいは「とうぼ」で呼ばれていたが、明治のある時期に「ゆたんぽ」になったと考えられる。

しかし、いつ頃湯たんぽの名称が生まれたのか、今のところ確証は得られてない。本報では正岡子規の俳句を資料として湯たんぽの名称出現時期の推定を試みる。

〈われ老いぬ 春の湯たんぽ 維摩経 明治二十九年三月 病子規〉の書がある（図1）。

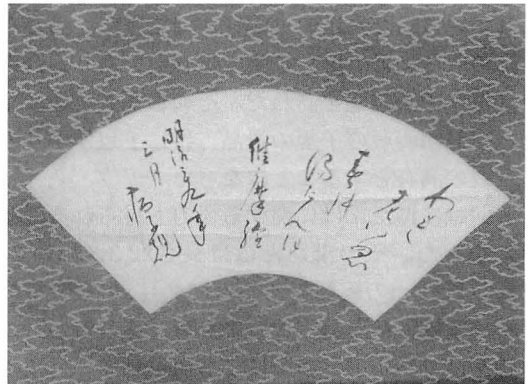


図1 正岡子規の書（筆者、蔵）

このことから明治29年には湯たんぽの呼び名はあったことが明らかである。この時期に子規は湯たんぽの存在を知り、俳句の内容から実際に湯たんぽを使っていた可能性がある。

2009年秋、司馬遼太郎原作「坂の上の雲」の予告番組が作られることになった。このドラマには正岡子規が登場する。子規の妹、律は共立女子大学の前身、共立女子職業学校に在学、卒業後は裁縫の教員として母校に残った。そのこともあって番組制作のディレクターから律のゆかりの資料やエピソードの相談を受けた。私は子規と湯たんぽのことを説明したが、そのことが番組制作に多少影響を与えたように思う。平



図2 湯たんぼ (財団法人子規庵保存会、蔵)

成21年11月の予告番組に子規の遺品である湯たんぼが映し出された。それが子規の句にうたわれている湯たんぼの可能性がでてきた。湯たんぼの収蔵先は(財)子規庵保存会であり、台東区根岸の子規庵を訪ねた。そのことが契機になって財団所蔵の子規の遺品、特に子規ゆかりの端裂の調査をすることになった。

同時に湯たんぼに関する協力も得られることになった。その湯たんぼは長さ22.3、幅14.2、高さ11.0cmの陶製である(図2)。信楽窯業技術試験場、伊藤公一氏によれば「青みがかった釉薬はコバルトと藁灰による海鼠釉で、信楽の火鉢に見られるものと同一である。湯たんぼの底についている粒状の小石は、焼成時に窯底につかないように敷かれた珪石の粒で信楽焼の特徴である」との見解をえた。

## 2. 子規の句に見られる湯たんぼ

(財)子規庵保存会の役員の方々から湯たんぼを詠んだ子規の俳句は他にもあるというご教示と、具体的な文献資料をいただいた。子規は明治18年から35年までの間に約2万3千6百余りの句を残している。その中から湯たんぼに関する句を取り上げる。

明治27年 初めの冬

- (1) 大仏の籠に寝たる湯婆(たんぼ)哉

明治28年12月 冬

- (2) 傾城のひとり寝ねたる湯婆(たんぼ)哉  
(3) 舟に寝る遊女の足の湯婆(たんぼ)哉

明治29年 3月

- (4) われ老いぬ 春の湯たんぼ 維摩経

明治29年11月

- (5) 冷え尽くす湯婆(たんぼ)に足をちぢめけり  
(6) 目さむるや湯婆(たんぼ) わつかに暖き  
(7) ある時は手もとへよせる湯婆(たんぼ)哉  
(8) 古湯婆(たんぼ) 形海鼠に似申すよ  
(9) 古庭や月に湯婆(たんぼ) の湯をこぼす  
(10) 貧乏は妾も置かず湯婆(たんぼ) 哉  
(11) 胃痛やんで足のぼしたる湯婆(たんぼ) 哉  
(12) 碧梧桐のわれをいたわる湯婆(たんぼ) 哉  
(13) 氷囊を戴き足に湯婆(たんぼ) を踏む

明治31年 冬

- (14) 遼東の夢見てさめる湯婆(たんぼ) 哉  
(15) ひとり言ぬるき湯婆(たんぼ) をかかえけり

明治32年 4月 春

- (16) 春寒き机の下の湯婆(たんぼ) 哉

明治32年 冬

- (17) 湯婆(たんぼ) 燈炉室あたたかに読書哉  
(18) 祝宴に湯婆(たんぼ) かかへて参りけり

以上の18句の内、17句は湯婆を3文字の〈たんぼ〉と詠んでいる。4番目にある明治29年の1句のみ〈ゆたんぼ〉の4文字である。明治27年から32年にかけては、〈たんぼ〉と〈ゆたんぼ〉3文字と4文字の違いはあるが、同じ意味で使われていたことが分かる。

近代写生句の創始者といわれる正岡子規の句は、身近な生活を実によく観察している。このことから明治27年頃、子規の周辺だけでなく、

当時に一般的な生活の中に冬の暖房具としての湯たんぽが登場してきたことが伺える。

『子規全集第二巻』（講談社）には、明治28年の句「傾城のひとり寝ねたる湯婆哉」は前年の作「傾城のひとり寝ねたる寒さかな」の「、、ひとり寝ねたる寒さ」よりも、湯婆との配合により詩情を見出し、「寒さ」の句を抹消した（明治27年、抹消番号266）、とある。湯たんぽは次第に生活に浸透してきたが、まだ新鮮であり、魅力ある用具であったことが感じられる。

明治29年11月の句「古湯婆形海鼠に似申すよ」は湯たんぽの形状を示している。湯たんぽが海鼠（なまこ）の形をしているということは、遺品の湯たんぽと同類と考えられる。

子規は明治29年2月、左の腰が腫れて痛みがひどくなり、以後ほとんど臥褥のままの状態、歩行にも困難な状態であった。その頃、詠った句が「われ老いぬ 春の湯たんぽ 維摩経」である。同年11月の句「碧梧桐のわれをいたわる湯婆哉」は、弟子の碧梧桐が子規の病状を見舞い贈った湯たんぽに対する子規の感謝の気持ちを詠ったものといえよう。

明治27年初めから明治28年12月にかけての3句  
大仏の籠に寝たる湯婆哉

傾城のひとり寝ねたる湯婆哉

舟に寝る遊女の足の湯婆哉

は、世の中に出現してきた湯たんぽの存在は知りつつも、客観的な視点であり自ら使用した実感は表現されていない。4句目以降は湯たんぽが子規の身近な存在になり、観察し、体感を主観的に詠っているものと感じる。

なお、子規が湯たんぽを最後に詠った句「祝宴に湯婆かかへて参りけり」について興味深い事実を知った。この句は子規全集に「不折の画室開きに我も会して3句」の1句である。

平成22年9月子規庵保存会主催の「糸瓜忌」記念講演会・座談会で、不折の孫に当たる中村初子氏の話から、明治32年12月24日、画室開きの祝いに二人乗りの人力車に蒲団を敷き子規は

参加したという。当時、子規の身体の容態はかなり悪かった。この句を知った時、かなり重い陶製の湯たんぽを抱えて出かけたとは考えにくかったが、蒲団の傍らに湯たんぽを抱く姿が想像できた。なお、このことについては子規選集、『子規と日本語』の「消息」に不折の画室開きに寒気を冒し湯婆（たんぽ）をかかえて出かけた様子、また画室の感想、参集した諸氏、会食の賑わいについて語られている。

### 3. 子規の句に見られる暖房具

山下一海著『俳句で読む 正岡子規の生涯』によれば子規の最初の句は、明治18年1月、18歳の時とされ、最後の句は明治35年9月18日のことであった。子規が詠んだ俳句の数は、推敲をかさね変化し、ある時は抹消され、その数はとらえ方によって変わるが、2万3千6百余りとされている。写生句の創始者といわれる正岡子規の膨大な句は、明治中期から後期にかけての変化に富んだ時代の事象を表わしている。

冬の暖房具は湯たんぽだけでなく、こたつ（巨燵、火燵、炬燵、、、）、火鉢、火桶、懐妊、暖炉（煖炉）、囲炉裏、ストーブなどが随所で詠われている。

明治20年

撫でて見てまた撫でて見る火鉢哉（抹消句）

明治22年

初雪や〇へもて出る置こたつ（抹消句）

明治23年

雪の日や巨燵の上に眠る猫

明治25年

穂薄になでへらされし火桶哉

貧乏は掛乞も来ぬ火燵哉

撰集の沙汰にくれたる巨燵哉

第一は雪なり第二は巨燵なり（抹消句）

兎の手を皸手に握る火燵哉（抹消句）

雪院へ火鉢もて行く寒さ哉（抹消句）

冬籠り倉にもちこむ巨燵なり（抹消句）

明治26年

俊成のなでへらしけり桐火桶  
 わびしさや団炉裏に煮える○の雪  
 我恋は火鉢の消えし恨みかな (抹消句)  
 筆いれて掻き探したる巨燵哉 (抹消句)  
 寒食の日より巨燵を塞きけり (抹消句)  
火燵から見える処に梅の花 (抹消句)  
 今一つ背にもほしき火桶哉 (抹消句)  
 鳳凰の○や見るらん桐火桶 (抹消句)

明治26年春

巨燵なき蒲団や足ののべ心

明治26年冬

いたいけに童の運ぶ火桶哉  
 関守の鞆丸あぶる火桶哉  
 番小屋に昼は人なき火桶哉

明治27年

炬燵して語れ真田が冬の陣  
 いくさから便とどきし炬燵かな  
 絵屏風の倒れかかりし火桶かな

明治28年

巨燵から見ゆるや橋の人通り  
 人もなし巨燵の上の草双子  
 裁縫の背中にしたる巨燵哉  
 丁稚叱る身は無精さ巨燵哉  
 押しかけて妾になりし巨燵哉  
 かりそめの苦説にすねる巨燵哉  
 みちのくの旅籠屋さびて巨燵哉  
 昼中の傾城寝たるこたつ哉  
 老いはものの恋にもうとし置火燵  
 なにはなくとこたつ一つを参らせん  
 風呂敷を掛けたる昼の巨燵かな  
 文机の向きや火桶の置き処  
火桶張る昔女の白髪かな  
 織物の背中にしたる炬燵かな

明治29年

並べけり火燵の上の小人形  
 人老いぬ巨燵を本の置処  
 子を抱いて巨燵に風を揚げる人  
 男の童と女の童と遊ぶ巨燵哉  
 梢飛燕巨燵の上に舞はせばや  
 いもあらばいも焼かうもの古火桶  
 ある時は背中へ入れる懐炉哉  
 三十にして我老いし懐炉哉

明治30年

いもの皮くすぶりて居る火鉢哉  
 法律の議論はじまる火鉢哉  
 穴多きケットー疵多き火鉢哉  
 丈八のお駒をなぶる火鉢哉  
火鉢抱いて灰まぜて石を採り得たる  
 わびしさは炭団いけたる火鉢哉  
 小説の趣向つづまらぬ火鉢哉  
 医師の宅や火鉢に知らぬ人と対す  
火鉢の火消えて何やら思うかな  
 もの神の火鉢の上にあらわれし  
 煙草尽きて酒さめぬ火鉢による  
 消灯の鐘鳴り渡る暖炉かな  
 つきづきしからぬもの日本の家に撥炉  
ストーヴに濡れたる靴の裏をあぶる  
 道場の隅に火のなき火鉢哉  
 寶生の観世ののしる火鉢哉  
火鉢二つ二つとも欠けて客来らず  
火桶張るおうな一人や岡の家  
 手習の手凍え火鉢の火消えたる

明治31年

火消えて堅炭の凝る火鉢哉  
巨燵あけて蓋のしてある矢倉哉

明治32年

火鉢火なし手をひっこめる余寒哉  
 冷酒や柚子味噌を炙る古火桶  
 置火燵雪の兎は解にけり

湯たんぼの形態成立とその変化に関する考察V

表1 暖房具を季語にした子規の句数

	湯たんぼ	こたつ	火鉢	火桶	懐炉	暖炉	囲炉裏	ストーブ	計
明治18 (1885)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明治19 (1886)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明治20 (1887)	0	0	1	0	0	0	0	0	1
明治21 (1888)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明治22 (1889)	0	1	0	0	0	0	0	0	1
明治23 (1890)	0	1	0	0	0	0	0	0	1
明治24 (1891)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
明治25 (1892)	0	5	1	1	0	0	0	0	7
明治26 (1893)	0	4	1	6	0	0	1	0	12
明治27 (1894)	1	2	0	1	0	0	0	0	4
明治28 (1895)	2	9	0	2	0	0	0	0	13
明治29 (1896)	10	5	0	1	2	0	0	0	18
明治30 (1897)	0	0	15	1	0	2	0	1	19
明治31 (1898)	2	1	1	0	0	0	0	0	4
明治32 (1899)	3	1	1	1	0	0	0	0	6
明治33 (1900)	0	1	4	0	0	3	0	0	8
明治34 (1901)	0	0	0	0	5	2	0	1	8
明治35 (1902)	0	0	0	0	0	1	0	0	1
計	18	30	24	13	7	8	1	2	103

明治33年

鼠追ふて餅盗みくる火鉢哉  
 荷しまひや火燵のそはの夏衣  
 菓子箱をさし出したる火鉢哉  
 煎餅かんで俳句を談す火鉢哉  
 蒲団著て手をあぶり居る火鉢哉  
 暖炉据ゑて冬暖き日なりけり  
 我庵の暖炉開きや納豆汁  
 火を焚かぬ暖炉の側の冬牡丹

明治34年

火燵塞ぐ今に主の病かな  
 腹稿を暖めて居る懐炉かな  
 芝居見や懐炉を入れたる腹の冷  
 野の茶屋に懐炉の灰をかへにけり  
 懐炉冷えて上野の闇を戻りけり  
 びろうどの青きを好む懐炉かな  
 病床の位置を變たる暖炉かな  
 ストーブにほとりして置く福寿草  
 暖炉焚くやは璃窓外の風の松

明治35年

暖炉たく部屋暖にふく寿草

(注、表記は、できるだけ文献資料に従ったが、特殊な漢字はかな文字で、あるいは○で省

略した。)

これら暖房具を詠った句の出現時期と頻度を表1に示す。巨燵、火燵、炬燵、、、は〈こたつ〉で、暖炉と榎炉は暖炉に統一した。また囲炉裏(囲炉裏)、ストーブ(ストーヴ)は現代用語にした。

それらの句の中にいろいろな暖房具が詠われている。こたつが30、火鉢が24、湯たんぼ18、火桶(木製の火鉢)13、暖炉8、懐炉7、ストーブ2、囲炉裏が1、合計103句ある。

湯たんぼが出現する前、明治20年から26年の間は、こたつ11句、火桶7句、火鉢3句、囲炉裏1句であった。

湯たんぼが18句出てくる明治27年から32年を見ると、こたつ18句、火鉢17句、火桶6句、懐炉と暖炉が2句、その他ストーブ1句である。湯たんぼの比率は四分の一以上を占めている。この時期は陶製の火鉢が火桶を上回っている。

明治33年以降では、暖炉6句、懐炉5句、火鉢4句、ストーブ1句である。

暖房具が登場する明治20年(1887)から明治35年(1902)までの主な暖房具100句(除、囲炉裏、ストーブ)の経年推移を図3に示す。

懐炉は、大正12年に的場仁市がプラチナの触

媒作用を利用し気化したベンジンをゆっくりと発熱させる「白金懐炉」が開発された。それ以前は懐炉灰を火種にした懐炉が使われていた。明治34年の子規の句〈びろうどの青きを好む懐炉かな〉に出てくる懐炉は懐炉灰を使ったものである。その句を付けた〈桃太郎灰 びろうどの懐炉〉が資料にある(図4)。子規が句に詠った青いびろうどの懐炉と同じものなのかは分からないが、子規の句を、キャッチコピーにした商品があったことは興味深い。

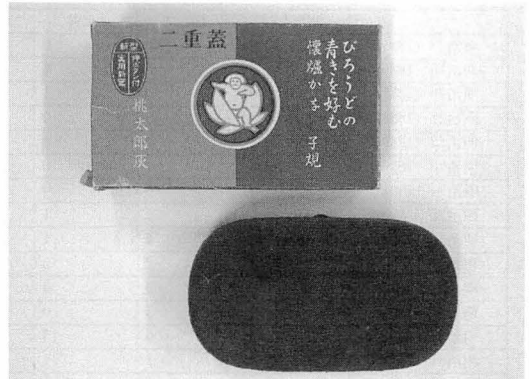


図4 びろうどの懐炉と子規の句が載る外箱(筆者、蔵)

本報をまとめるに際しては財団法人子規庵保存会の多大なご協力を得たことに感謝いたします。

参考文献

- 1) 伊藤紀之「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅰ」共立女大学家政学部紀要53.25-32 (2007)
- 2) 伊藤紀之「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅱ」共立女大学家政学部紀要53.67-73 (2008)
- 3) 伊藤紀之「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅲ」共立女大学家政学部紀要54.1-8 (2009)
- 4) 伊藤紀之「湯たんぽの形態成立とその変化に関する考察Ⅳ」共立女大学家政学部紀要54.13-21 (2010)
- 5) 『子規全集』第1-3巻 講談社(1975~7)
- 6) 高橋幹夫『絵で知る江戸時代—江戸萬物事典・普及版』芙蓉書房出版(1998)
- 7) 山下一海著『俳句で読む 正岡子規の生涯』永田書房(1992)
- 8) 子規選集第3巻 正岡子規著・長谷川權編『子規と日本語』増進会出版社(2001)

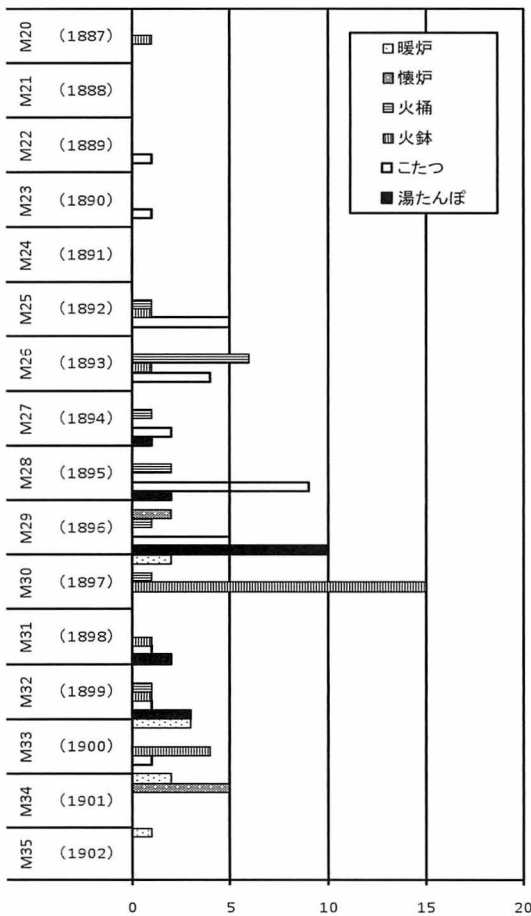


図3 子規の句に詠われた主な暖房具の経年推移